

上演① 岐阜農林高校「烈 -いきる-」

農業と戦争を軸に「命」の重さや尊さを考えさせられるような強いメッセージ性があり、心に残る作品でした。作品から岐阜農林の皆さんが真剣に戦争について、命について考え作品作りに取り組んでいるのが伝わり、感動しました。

作劇は章立てて物語が進行されており、章ごとに視点が変化したり、シーンの雰囲気が変わるため、60分集中してみました。俳優さんの熱量もあり、圧巻の演技でした。また農業をしている時の農具の構えがとても美しく身体表現が素晴らしかったです。

岐阜農林高校さんの強みだと思うのですが戯曲からも俳優の演技からも「育む/生きる」ということの力強さが表層の表現ではなく、しっかりと根付いているように感じられました。それはこの作品にとっても効果を生んでいて説得力を増していたように思います。

戯曲では紀伝体（きでんたい）である個人へ集約するようなセリフが随所にちりばめられていますが章でクローズアップされるのは尊より周りの人物になっている構成で誰を軸に見て良いかが少し迷いが出てしまったように思います。反戦、命の尊さのテーマであればある個人のみでも群像劇からのアプローチでも面白いように思います。ですが今回は曖昧になっているように感じました。

演技も全体的にメッセージ性が強く見応えがありました。しかし積み上げという意味では尊のこころの揺らぎはあまり感じられないような作りになってしまっていたように感じました。農業に対しての向き合い方は最初、やる気がないところから始まるとか章ごとに尊に影響を与える人が現れると思いますが影響を与えるセリフだけではなくそれを聞いた尊がどう感じているかをもっと知りたいと感じました。理不尽なこと（戦争や震災）を経て心の痛みを抱えた状態（解決しなくても良いと思う）の人が農業に取り組んでいる人だからこそ周りがそれに影響され変わっていく。“変化”をもっと感じるようにする工夫を考えることでよりこの作品の深みが効果的に伝わりやすくなると思いました。